「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」

調 査 研 究 報 告 書

平成 12 年 3 月

横浜国立大学附属図書館

ま え が き

大学図書館は今、電子化、情報の多様化などの波を受けて、一大変革の時期を迎えようとしている。このため、先進の機関の動向をうかがいつつ、右往左往することの多い日々であるが、逆にこのような時期であるからこそ、かえって、本来の大学図書館のありかたを模索し、過去にとらわれることのない将来像を追求することのできる好機が到来したとも言えるであろう。

横浜国立大学附属図書館にあっても、図書の収蔵スペースの狭隘化が進行していることともあいまって、このところ何年にもわたり施設の増築改修を希望してきているが、今回の学長裁量経費によってお認めいただいたプロジェクトは、そうした日ごろの要求と直結するものではなく、むしろ、お集まり願った学内外の委員によって、あるべき大学図書館像をご提示いただき、その理念に基づいて本学の現況を踏まえたトータルな将来計画を構想しようと企図したものであった。さいわい諸領域を代表する識者による熱心な討論が繰り広げられ、一員である私が言うのもはばかられるが、まことに刺激的で胸おどる議論の連続であった。理念と大きな夢とを共有しながらの議論がいかに具体的な将来計画に有益であるかがあらためて痛感されることともなった。

ここに、ほぼ一年間を費やしたプロジェクトの調査研究の結果を報告書の形で提示できる運びとなったが、むろんこの行文は、語られた夢を現実のものとしていく際の一澪標たるにすぎない。しかしながら、澪標は澪標として、進むべき附属図書館の航路の一助ともなり得るであろうと密かに自負している。

また、本プロジェクトにご多忙の中をおして参集いただいた委員各位、立ち上げ運用に当たって特別なご配慮をいただいた学長、新旧事務局長、会合の事務一般を受け持ってくださった図書館職員各位に対して、ここであらためて御礼を申し上げたい。

平成12年3月

横浜国立大学附属図書館長

平　田　喜　信

目　　次

調査研究報告

Ⅰ　本学図書館のあり方 …… 1
1　基本的あり方
2　本学図書館のあるべき機能
（1）サービス機能
（2）サービスの基盤となる機能
1）情報の収集・提供機能
2）資料の保存
3）コンサルティング機能
4）電子図書館的機能
5）空間的機能

Ⅱ　図書館施設の改善 …… 3
1　基本的あり方
2　具体的改善事項
（1）フロアープラン
（2）館内空間
（3）インテリジェント機能

付属資料

調査研究経過 …… 6
研究分担者テーマ別報告要旨 …… 7
研究分担者名簿 …… 12

「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」
調査研究報告

Ⅰ　本学図書館のあり方

1　基本的あり方

知の蝶番としての図書館

①　図書館は、その知的集積によって絶えず情報を発信し、知を触発する「知の蝶番」として機能することが必要である。このため、学内外の情報関連機関と有機的に連携して情報の受発信基地・加工蓄積基地、そして全構成員の文化的交流の場となるべきである。

使いやすさ（ユーザビリティ）を求めて変化する図書館

②　図書館は、学生や教官の利用形態の変化に対応した使いやすく多様な機能空間を柔軟に創出し、知的創造活動の中核となるよう常に変貌していくべきである。

2　本学図書館のあるべき機能

（1）サービス機能

多様な知的活動・知の生成を支援するチャネルとしての図書館

①　多様な学生の自学自習の場としての学習図書館的機能を強化すべきである。そのためキャンパスの中心にある施設として来館利用に配慮した学習環境の整備を図る必要がある。

②　ネットワーク経由の情報サービスを中心とした研究活動支援機能を強化するとともに、貴重図書・専門図書等の資料を落ち着いた環境で研究閲覧できるスペースや教材の作成、学術情報の発信も重視すべきである。

③　大学の国際化、大学院化の動向に留意しつつ留学生や大学院生へのサービスに配慮する必要がある。

④　開かれた大学の一環として、地域・社会の一般市民の生涯学習ニーズに応えるための所蔵資料の公開提供を進めるほか、外部情報機関との連携窓口や大学広報機能の一端を担うことも必要である。

（2）サービスの基盤となる機能

1）情報の収集・提供機能

選書機能を重視した図書館

個人で収集することが困難なデータベースや蔵書を以下のような観点から収集・保存することが必要である。

①　学生の自主的な学習活動を支援するため、授業・シラバスと密接に関連した基本図書や参考図書を、図書館職員が各専門分野の教官と連携して主体的

に選定し収集提供する必要がある。

② 特徴ある蔵書コレクションを構築するため、本学の教育研究上の基本戦略等に留意した重点的収集分野の検討を今後全学的に進めることが必要である。

2）資料の保存

学術資料の保存機関としての図書館

① 学内において教育研究の必要から収集された図書や学術雑誌等は、他大学・他機関の研究者からも広く利用されており、時代を超えた文化的資料としてこれらを保存していくことは本学の社会的責務の一つである。

② このため狭隘化した保存スペースの拡充を早急に図る必要がある。また、常に蔵書内容の点検を行い本学が所蔵する必要のない資料を整理するとともに、図書館間における分担保存、及び資料の電子化や自動化書庫など新しい保存システムについても検討すべきである。

3）コンサルティング機能

情報ナビゲーターとしての司書

① 情報化が進展する中で、断片的な情報の伝達ではなく、情報の解釈と利用の方法論を対面サービスとして伝えることは、図書館が果たすべき重要な役割の一つである。

② そのため、情報や資料に関する専門的な知識と検索技術によって、利用者の立場に立ったレファレンスサービス、情報リテラシー教育の支援を更に強化すべきである。

4）電子図書館的機能

先進性を追求する図書館

① 図書館は、総合情報処理センターとの積極的な連携を推進するとともに、必要に応じて学内のコンピュータラボ等の施設と有機的にネットワークを結び、学内学術情報基盤の中核として機能すべきである。

② 図書館は、学内ネットワーク基盤を活用して電子図書館的機能を更に整備し、情報アクセス環境の提供や電子ジャーナルサービスなどネットワークサービスの充実、資料の電子化による学内外への情報の発信、先端的情報システムの利用実験など先進的事業を積極的に展開していくべきである。

5）空間的機能

情報が傍らにある文化空間としての図書館

① 図書館は、学生のキャンパスライフの拠点、文化的情報発信基地・サロンとして、機能的に区分された多様な空間を備えるべきである。

② そのため、マルチメディア対応のスペース、研究者用スペース等を設置するとともに、簡単な飲食が可能なラウンジやグループ閲覧スペース、学生イベント支援、公開講座、展示広報の可能な多目的ホール等の新たなスペースを盛り込んだ施設空間を確保・創出することが必要である。

Ⅱ　図書館施設の改善

1　基本的あり方

（1）図書館は、キャンパスの中心に位置する施設として本学のイメージ戦略に配慮したものであると同時に、文化的交流空間として学生の誇りとなり、また思い出に残るような施設であるべきである。

（2）館内は、資料・情報の使いやすさに配慮した快適空間とするとともに、軽飲食やグループによる利用など、多様なニーズと学生の新しいライフスタイルに合わせた空間バリエーションを用意することが必要である。

（3）また、館内は、多様な利用ニーズに合わせて、光あふれる空間と落ち着きある空間を調和的に配置したものとすることが望ましい。

（4）社会に開放された施設として、障害を持つ利用者だけでなく高齢者等にも配慮したユニバーサルデザインの採用や、多様な利用者に対応した館内セキュリティーの確保、環境に優しい省エネルギーへの対応などに配慮する必要がある。

（5）図書館は、キャンパスにおける代表的な共通施設として重要な建築物であるため、その施設計画の作成に当たっては、学内の関係委員会等との十分な調整を図ることが必要である。また、その基本設計については、建築専門家を含めて広く意見を求め、全学的な理解と協力を得ながら質の高い建築物を目指すべきである。

2　具体的改善事項

（1）フロアープラン

多様な機能空間を持つ図書館

①　今後、図書館は、施設全体の調和を踏まえながら、特に以下のスペースの充実に配慮する必要がある。

（更に充実すべき既存スペース）

a　研究用資料の保存スペース
b　視聴覚閲覧スペース
c　海外交流情報コーナー
d　複写コーナー
e　研究者用閲覧スペース
f　新着図書展示コーナー

（新たに備えるべき機能スペース）

a　ライブラリーラウンジ
長時間滞在型の図書館利用のためのゆとりと憩いの空間としてオープンカフェ等のラウンジ機能を重視すべきである。

b　グループ閲覧スペース
ガラス張りで、会話可能な多人数利用のスペース

c　マルチメディア・情報閲覧スペース
今後は、マルチメディアコンテンツを利用するためのスペースが必要である。

d　多目的メディアホール
講演会や学生イベント等の情報発信及び図書館職員の研修等

e　情報リテラシー支援スペース
資料探索や情報検索など、実際の図書館資料を使った図書館利用指導を行うスペース。朗読なども行う。

f　展示広報スペース

g　教材開発・広報発信スペース

h　貴重書等の保管閲覧スペース

②　現有施設は、入口や各フロアー等を結ぶ動線が複雑であり、これを改善して使いやすい図書館とする必要がある。

③　エリアやフロアーの設定は、例えば、オープンな広い空間の中で家具・什器等によって仕切るなど、利用形態の今後の変化に柔軟に対応できるよう計画することが望ましい。

（2）館内空間

快適で使いやすい図書館

①　館内の明るい空間を生かしたアトリウム空間や緑、絵画・彫刻等を設置するなど快適なアメニティー空間の創出を目指す必要がある。

②　館内の各フロアーは、色やデザインに配慮した気持ちのよい什器や家具をおくとともに、内装等に配慮して統一感のある空間とすることが望ましい。

③　少ない情報量で的確に誘導できるわかりやすいサインに配慮し、使いやすい図書館とすることが望ましい。その際、内装やサイン板の色等を効果的に利用することもできる。

（3）インテリジェント機能

紙資料と電子情報が共存するメディアミックス型図書館

①　活字資料の利用に加えて、情報機器を使用しながら学習・研究する新しい利用スタイルにも対応するメディアミックス型図書館とするため、館内の情報インフラの整備を更に推進することが必要である。

②　パソコン等の情報機器利用のため、館内に情報閲覧スペースを設置することや、持ち込みパソコンに対応した情報コンセントやモバイル情報機器に対応した無線システム等の設置、パソコンの貸出等を検討する必要がある。

③　情報閲覧スペースは、館内の他の空間から区別して設置し、従来の活字資料や映像等もあわせて利用できるハイブリッド型の運用を目指すとともに、情報機器の効果的利用を支援するため専門のアシスタントの配置を考慮することが望ましい。

④　音声映像メディアは、今後、ＤＶＤなどの最新メディアの収集・利用を図るとともに、その運用に当たっては著作権に十分留意する必要がある。

⑤　外国放送を視聴できる衛星放送受信システムを導入し、ホールや館内で視聴できるよう整備するとともに、例えば、ＳＣＳ（スペースコラボレーションシステム）やテレビ会議システム等の新しいシステムの利用も検討することが望ましい。

付 属 資 料

「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」
調査研究経過

平成11年

9月10日（金）　第1回会合

・大学図書館施設のあり方について
・中央図書館増築・改修計画について
・中央図書館施設の視察
・プロジェクトの今後の進め方

10月22日（金）　第2回会合

・テーマ別報告
「国際基督教大学における新館建築のコンセプト」
（長野由紀　氏）
「大学の中での図書館の位置づけ」
（北山　恒　氏）
・中央図書館の増築・改修計画について

12月1日（水）　施設調査（埼玉県立大学図書館）

12月15日（水）　第3回会合

・テーマ別報告
「これからの附属図書館」
（植松貞夫　氏）
「図書館とメディア」
（梅本洋一　氏）
「知的活動拠点としての図書館」
（平野哲行　氏）

平成12年

2月1日（火）　第4回会合

・図書館施設将来計画における基本的コンセプトについて

2月15～16日　施設調査（富山大学附属図書館）

3月8日（水）　第5回会合

・調査研究報告書について

「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」
研究分担者テーマ別報告要旨

（以下、発表順に掲載。敬称略）

国際基督教大学における新館建築のコンセプト

長野　由紀

○新館は３階建て。全面開館は、2000年９月の予定。
地下が自動化書庫、地上の２階のフロアーは、スタディエリアとして個人席 120 に情報端末を置き図書はまったく置かない完全な電子情報利用のための広い空間としている。
新しい機能は、情報アクセス、情報リテラシープログラムの支援、グループ学習などである。

○新図書館においては、マルチメディアルームを使って授業やオリエンテーションを行うこと、教員へのサポートとして教材を作るなどのファカルティサービス、情報機器の利用に回答するヘルプデスクの設置など考えている。

○コンピュータセンターとの役割分担として、図書館は端末を使って自主学習を支援し、資料の利用、論文を書く、情報検索をするなどのサービス機能を分担する。
一方、コンピュータセンターはレベルの高いコンピュータ利用のプログラムをサポートする。

○新館建築のコンセプトとしては、次の点があげられた。
- 「全面開架」を軌道修正して「一部閉架」とすること
- 蔵書の上限冊数を設定して特徴ある蔵書構成のための選書機能を持つこと
- 情報の形態の別なく資料を提供すること
- 情報アクセスや情報利用のためのスペースを設けること
- 英語教育をサポートするためのライティングセンター機能をもつこと
- 視聴覚設備の導入
- 自動化書庫の導入
- 少ない館員が能率的に働くことができる環境

○書庫は、一部閉架とし、積層・電動・集密などを検討し、図書の収納と取り出しの効率、暖冷房の経費等を総合的に考えて最終的に自動化書庫の導入が決まった。

（平成11年10月22日第２回会合にて報告）

大学の中での図書館の位置付け

北山　恒

○大学の評価の中でも図書館の果たす役割が大きい。オープンキャンパスでも、図書館がどうなっているかが評価のひとつになっている。

○横浜国立大学がどういうポジションを外部に持つか。国際的な先端的研究開発をする大学か、地域と連携していく大学の像か、伝統的大学か、それによって図書館のあり方も変わってくる。大学の戦略、ビジョン、コンセプトがあって図書館をどうするかが決まってくる。

○図書館は、今後、インフォメーションセンターというような形式になり、大学は学生が主体的に学ぶラーニングセンターへと変化する。これに伴って、授業形式にも変化が起き（美大などで、机、椅子を取り払った例がある）、「大学」そのものが「図書館」であるという反転が起こる可能性がある。その時、現在のローカルな意味の図書館は消滅するかもしれない。

図書館の中で講義が行われる環境や、図書館的なファンクションが大学全体に必要になる。

○望まれる図書館のイメージとして、24 時間サービス、館内の情報インフラやコンピュータラボ、情報チャネラーとしての司書（東急ハンズの物知り店員）、ガラス張りのグループ学習スペース、どこでも待たずに利用できるコピーサービス、館内での飲み物利用等（身近な場所というイメージ）、わかりやすいサインと気持ちのよい家具などがある。

○今後、他の大学図書館の情報収集が必要。同じ図書館でもアメリカ型とヨーロッパ型という違ったあり方が存在する可能性がある。

日本では、慶応大学湘南キャンパス、埼玉県立大学、東京大学工学部建築学科図書室などが注目される。

○利用者の学生に現在の図書館の問題点と望まれる図書館のアンケートを実施するなどしてできるだけ広く公開した形で計画を進めることが重要である。

○スタンフォード大学と Lewis & Clark College の図書館の紹介。

（平成 11 年 10 月 22 日第 2 回会合にて報告）

これからの附属図書館

植松　貞夫

○大学図書館における利用のされ方の現状、利用者の学習・研究スタイルの変化を踏まえて、図書館の復権を図り存在意義を再確立するためには、①頼られる図書館、②来館してもらえる図書館、③大学全体が図書館という発想の転換、④地域や社会に開かれた図書館、などを基本コンセプトとすることが重要。

○「頼られる図書館」となるためには、情報通信技術の進歩の方向が情報受発信のセルフサービス化や専門家不要に向かっていることを念頭に、次のことが必要。

・個人では持ち得ないデータベースやコレクションを備え、利用者を上回る知識によって的確で早い検索を提供することを図書館員の専門性とする。そのため職員の研修が必要である。

・図書館の組織や勤務の体制についての見直しも必要。職員の中で最もプロである人が最前線のカウンターに出る必要がある。職員による日常的な人的支援を重視することが最も重要である。

○「来館してもらえる図書館」となるために、

・快適な閲覧空間のほか、たくさんのバリエーションの中から利用者が自分の好みの空間を選べる、という環境にすることが重要。ラウンジ機能はもっと重視すべきである。

・多人数で声を出しながら学習できるグループ学習室は必須である。

・学生が個人的に学習した成果の発表の場としてのラウンジがあってもよい。

・メディアミックス型図書館への転換が必要。雑誌論文を見ながら関連情報をインターネットで見るとか、ビデオを見ながら本も見ることができるような環境整備が必要。

・図書館側で端末を設置するだけでなく、情報コンセントを設置して、利用者が自分の持ち込みパソコンで利用する環境の整備を考えるべきである。

○今後は、図書館経営マインドの転換が必要であり、その観点から、選書基準を作成することが必要。選書は図書館員が行うべきである。

○インターネットへの対応について真剣に考える必要があり、そのことを踏まえて、講義の受け方や、アカデミックリテラシー教育への図書館としての支援が必要。

○これからは一般社会人も大学の中にどんどん入ってくることから、セキュリティの確保を今後さらにすすめる必要がある。また、利用上のプライバシーにも気を付けなければならない。

（平成11年12月15日第3回会合にて報告）

図書館とメディア

梅本　洋一

○フランスのメディアテークの事情の紹介。

○印刷物を収集・収蔵し、それを開示する場所としての機能から、ネットワーク化された知の「蝶番」としての「メディアテーク」機能への転換が、これからの図書館には求められている。

○基本的あり方として、

・収蔵する場所には限りがあるので、ネットワーク化を前提に、求めるものが「どこに」収蔵してあるかを知る検索システムやコンピュータ・ルームを重視する。

・「公共図書館」ではなく、本学４学部の専門分野に適合した「大学の図書館」であることを選択し、収集の基準をつくる。

○収蔵資料の選定について、

・資料収集は、「なんでもまんべんなく少しずつある」から「このアイテムは充実している」に移行し、収集分野の選定は、専門の委員会を設置して行う。

・しかし、資料が「まんべんなくある」部分も必要。教養教育担当者から毎年授業の参考文献を 10 から 20 冊提出してもらい、それぞれ２・３冊そろえておく。全教員による選定はやめる。

○視聴覚メディアの使用と拡充について、

・収蔵する視聴覚メディアはＤＶＤとし、選定は関係教員が行う。（ビデオは場所をとる）。貸出は上映権の関係から行わない。

・ＣＤ－ＲＯＭは、資料検索関係だけにする。

・衛星放送受信システムで常に外国の放送を流す。ヘッドフォンを必要数用意し、貸出す。（衛星放送は図書館入り口にもモニターをつけていつも流す）

○情報発信のために、

・図書館は、情報発信を強化すべきである。図書館を教養教育の授業の場とし、例えば、衛星放送を利用して外国事情や世界の図書館を紹介する。また、キャンパスの中心の場所という地域性から、公開講座を常に開催したり、学生のイベント会場として施設を提供するなど。

・それらの情報を印刷物やホームページでもっと宣伝する。その場合、図書館には企画やコーディネイトする人が必要。

（平成 11 年 12 月 15 日第３回会合にて報告）

知的活動拠点としての図書館

平野　哲行

○横浜国立大学ならではの情報収集整備が必要。このため、蔵書テーマのプロデュース委員会（学外者を含む）を設置して、いかに特色ある蔵書としていくか検討する。検討は、横浜国立大学のキーワード（国際性、実践性、開放性、先進性）を手がかりとすることもできる。

○蔵書テーマの視点としては、①実学的・実証的情報を中心とする、②分野を定めて、その情報を中心に収集する、③海外の情報を中心にする、④先端技術を中心にする、などが重要。

○情報を収集する場から学習する場となることが求められている。学生のワークショップの拠点、知的活動拠点となるような図書館を目指すべきである。
その観点から、学生のワークショップブースとして、グループ学習室等には多くのスペースを充てるほか、高度レファレンス技術の向上、飲食等のサービスやアルバイトや学生の自主管理による24時間オープンや地域開放を検討する必要がある。

○リニューアルに際しての空間の考え方として、光の面では、光の演出により明暗を空間に設けて、メリハリのある環境を創る。特に１号館と２号館の間の空間はアトリウム化し、周辺にワークショップブースを集める。その他、ＢＧＭを使った音の演出、気分転換を意識した色の使用、社会に開放された施設にふさわしいユニバーサルデザインへの配慮など検討する必要がある。

○運営方針として、業務の効率化、情報リテラシー教育支援等の新しいサービス態勢の確立、電子化の促進、学内関連組織との連携を進めるほか、学外者を含む情報プロデュース委員会の設置が考えられる。

○１号館と２号館の空間のアトリウム化をテーマとした図書館の増改築計画案と、図書館用カートシステムの紹介。

（平成11年12月15日第３回会合にて報告）

「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」
研究分担者名簿（五十音順）

植松　貞夫	図書館情報大学図書館情報学部教授 （図書館情報大学副学長、附属図書館長）
梅本　洋一	横浜国立大学教育人間科学部教授
北山　恒	横浜国立大学工学部助教授
長野　由紀	国際基督教大学図書館長
早田　憲治	横浜国立大学事務局長
平田　喜信	横浜国立大学附属図書館長
平野　哲行	東京工業大学非常勤講師 （株式会社　平野デザイン設計）